

海外旅行計画時の周遊範囲決定行動に関する基礎的研究*

A Study on the Planning Process for Outbound Tourism Destination Choice*

清水哲夫**・八田亜由子***

By Tetsuo SHIMIZU**・Ayuko HATTA***

1. はじめに

旅行者が海外旅行を計画する時にどのようなプロセスを経て具体の“渡航先”が決まるのだろうか。この問いを実験的に追求してみたのが本研究である。

従来から観光目的地の選択行動を取り扱った研究は多数ある¹⁾。しかし、ほとんどの研究では、分析者側が「よく知られた地域名」でもって選択肢となる目的地を機械的に設定している。また、選択肢集合の形成プロセスを屋井ら²⁾は、日帰り観光を対象に目的地の大きさが出発地からの距離によって変化するモデルを提案しているが、結局は分析者側が目的地を機械的に設定していることには変わらない。それでも国内の日帰り観光が対象であれば、このような取り扱いも実務上大きな問題はないように見える。

しかし、これが海外旅行の目的地選択であれば事情が大きく異なる。「せつかく遠出をするからには限られた日程でできるだけ多くのスポットや都市を回ろう」と考えるのが人情であろう。それでもほとんどの人は、旅行を計画する時に最初のステージは単に「よく知られた地域名」を根拠に、〇〇へ行きたいと考えるであろう。この時、例えば、旅行者が“ローマ”に行きたいと考えてから最終的に“中部イタリア”の旅行になるケースと、“イタリア”に行きたいと考えてから“ローマ”を含めた“中部イタリア”の旅行になるケースを考えると、分析者側が選択された結果だけを見て選択肢たる目的地を設定することは、最初に“ローマ”や“イタリア”の大きさで一度は目的地が選択された事実を見落としてしまう。最初から“中部イタリア”という選択肢だったらここが選択されたかどうかは分からない。

最終的に“中部イタリア”が選択されたとしても、この決定が“ローマ”から発想されたのか、“イタリア”から発想されたのか、その要因やメカニズムが明らかになれば、

*キーワード：観光・余暇

**正員，博(工)，東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻准教授（東京都文京区本郷 7-3-1, Tel: 03-5841-6128, e-mail: sim@civil.tu-tokyo.ac.jp)

***非会員，修(工)

表-1 情報検索リストの一例

付箋	頁	内容
13	188	[フェ]周辺 (運跡群)
14	190	[フェ]スポット情報
15	184	[フェ]概要・アクセス・交通
16	100	[オランダ]概要・アクセス
17	6	[全体]地図
18	00	[オランダ]概要
19	104	[オランダ]アクセス
20	00	[オランダ]概要
21	100	[オランダ]アクセス
22	6	[全体]地図
23	100	[アロカ島]概要・アクセス
24	6	[全体]地図
25	230	[ハワイ]アクセス
26	240	[ハワイ]概要
27	242	[ハワイ]スポット情報

中部イタリアの“ちょっとした魅力”はあるが“絶大な魅力”はない小都市の立場として見た時に、ローマと協力して観光振興政策を構築すべきか、イタリアのレベルで観光振興を考えるべきかが明らかになる。このことは、ビジット・ジャパン・キャンペーンを展開する我が国の地方に数多ある“国際的にも認知される魅力が十分でない”地域での観光振興策に対する重要な示唆を与えるに相違ない。

なお、旅行の決定行動の分析では、目的地のイメージ形成の研究³⁾が多数存在するが、これらも目的地が分析者によって固定されており、イメージ形成から目的地の範囲が変化するような研究は筆者らが知る限り存在しない。旅行者行動を心理学的に捉えたレビュー文献⁴⁾でも、そのような研究事例は報告されていない。

以上の問題意識を踏まえて、本研究では、少数の日本人女性被験者に、まだ行ったことのない国の旅行計画を実際に立ててもらい、最終的な行程決定までのプロセスを逐一追って見ることにした。

なお、表題の“周遊範囲”とは、行程内に含まれる訪問スポットの地理的な広がりを表している。

2. 被験者による旅行計画決定調査の概要

本研究では、20～50代の女性20名に対して、オース

表-2 全被験者による行程計画

日	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	A11	A12
1	ME-PH-ME	SY	CA	ME	BR	SY	ME	CA-HM	SY	ME	SY	SY
2	ME-AD	SY-AR	CA	ME-SY	BR-AS	SY-AD	ME	HM	SY	ME	SY	SY
3	AS	AR	CA-AR	SY-BM-SY	AS-AR-AS	AD-SY-AR	ME-SY	HM	SY-ME	ME	SY-GC	SY-ME
4	AS-AR	AR-BR-GC	AR-SY	SY-AR-CA	AS-SY	AR	SY-AR	HM	ME	ME-SY	GC-AR	ME-PE
5	AR-DW	GC-SY	SY-BM-SY	CA		AR-SY	AR	HM-CA-KU	ME-AS	SY	AR-PE	PE
6	DW-KK		SY				AR-CA		AS	SY-AR	PE	PE
7	KK-DW-SY						CA		AS-SY	AR-SY-GC		PE-AR
8	SY									GC		AR
9	SY-BM-SY									GC		
10										GC-BR		

AD:アデレード, AR:エアーズブロック, AS:アリススプリングス, BM:ブルーマウンテン, BR:ブリスベン, CA:ケアンズ, DW:ダーウイン, GC:ゴールドコースト, HM:ハミルトン島, KK:カカドゥ国立公園, KU:キュランダ, ME:メルボルン, PE:パース, SY:シドニー

日	V1	V2	V3	V4	V5	V6	V7	V8
1	HC	HA(1)-	HA	HA	HA	HA	HC	HA
2	HC	LC(2)-	HA-HB-HA	HA	HA	HA	HC	HA-HP-HA
3	HC-HO	SP(2)-	HA	HA-HB	HA	HA-HC	HC-NT	HA-HU
4	HO-HA	HA(2)-		HB-HA	HA	HC	NT	HU-HA
5		DH(2)-		HA-SP		HC-VL-HC	NT-HU	
6		HU(2)-		SP		HC-TN-HC	HU	
7		DN(1)-		SP			HU-HA	
8		HO(2)-		SP-HA			HA	
9		NT(4)-PT-		HA-HU				
10		MN(3)-		HU				
11		MT(2)-HC		HU-HA				

DH:ドンホイ, DN:ダナン, HA:ハノイ, HB:ハロン湾, HC:ホーチミン, HO:ホイアン, HP:ハイフォン, HU:フエ, LC:ラオカイ, MN:ムイネー, MT:ミー, NT:ニャチャン, PT:ファンティエット, SP:サバ, TN:タイニン, VL:ヴィロン

トラリアかベトナムのうち行ったことがない国への海外旅行を計画してもらった。旅行計画時の情報をコントロールするために、「わがまま歩きブルーガイド」（実業之日本社刊）という標準的な構成のガイドブックを手渡し、計画時にはこれ以外の情報を参照することを禁じた。オーストラリアとベトナムを対象として選んだ理由については、南北の気候差や拠点間の距離感覚が日本のそれらと比較的似通っていること、複数の異なる地域イメージを持つ地域に分割できそうなこと、被験者が若干は両国の地勢に関する知識を有していると想定されること、である。

被験者には、ガイドブックを読む前に、対象国の基本情報（気候等）に併せて、認識する主要観光地の位置と圏域、観光地間の時間距離、地域区分を白地図に描ってもらった。その上で観光地のイメージワードを併せて記してもらった。

次に、ガイドブックを渡し、旅行計画を立ててもらった。日程や費用の制約については特に与えず、「常識的な範囲内」というリクワイアメントを課した。被験者に気になったページはその程度に応じて定められた色の付箋を貼るように指示して、かつ貼り付けた付箋に順番を書いてもらうことで、情報検索プロセスを詳細に追ってみた。表-1にある被験者の一部の情報検索リストを示す。行程は、訪問先（宿泊地も含む）、訪問先相互の利用交通手段、訪問先での目的を明記してもらったが、どの順番で行程内の訪問先が記入されたかを注意深く観察した。行程決定のためのテーマ設定も同時に聞いている。

次に、ガイドブックを読む前に記入してもらった白地図に、ガイドブックで得た情報を踏まえて、再度同じ情報を記入してもらった（以下、イメージマップと呼ぶ）。これにより、情報入手前後での観光地の圏域、観光地間の時間距離、地域区分、地域・観光地イメージの変化が把握可能となる。

これら以外にも、行程決定のポイントとなるような事柄については、適宜ヒアリングで極力情報を収集した。

20名の被験者のうち、8名(V1~V8)がベトナムの、12名(A1~A12)がオーストラリアの旅行計画を作成した。

3. 分析結果

(1) 被験者の作成した行程の特徴

始めに、被験者が作成した行程について考察する。表-2が20名全員の行程表である。日本との往復を除いて、オーストラリアは5~7日間程度、ベトナムは4日間程度が標準的な日程と見なされている。

オーストラリアでは、シドニーとメルボルンが拠点都市として多く滞在され、エアーズブロックとその拠点となるアリス・スプリングス、ケアンズとグレートバリアリーフ近辺も複数の被験者が行程に含めている。オーストラリアに持つイメージは大変多様であり、できるだけ多様な魅力を経験しようとして、想定していたより広域を周遊する行程が多数作成されている。それでもパースのような西部の都市を含める被験者は少ない。

一方、ベトナムでは、20日間以上の行程を作成した被験者を除き、比較的ハノイとホーチミンの両方を拠点

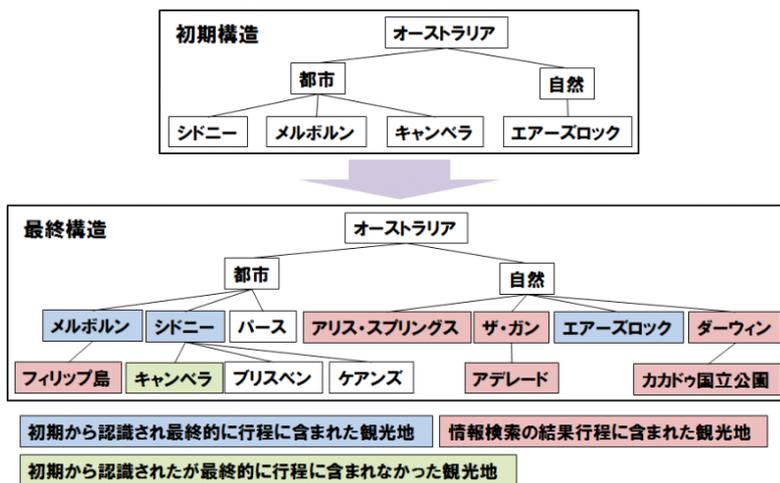


図-1 被験者A1の構造図

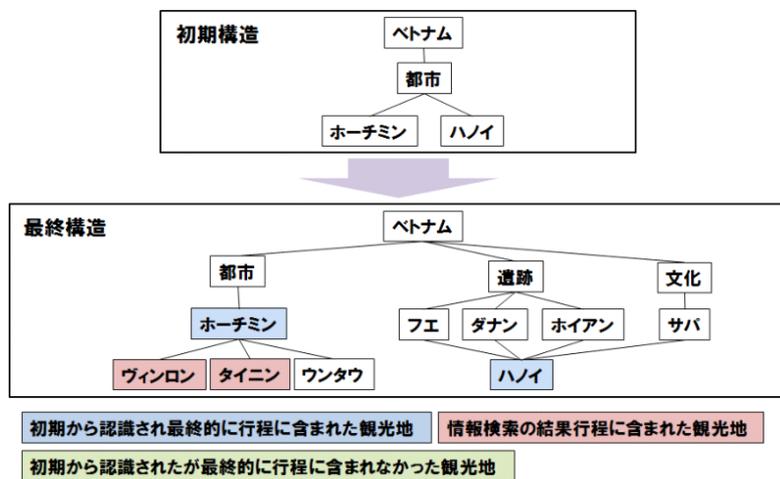


図-2 被験者V6の構造図

に、フエのような中部の都市を間に含めるような行程がほとんどである。これは、ベトナム国内の移動環境に対して高い評価を与えていないこと、オーストラリアのように地域間で魅力要素の差異が大きくないと考えられていること、が原因として考えられる。

(2) 観光地の構造化方法

次に、行程の決定の過程で、各被験者がどのように観光地間の関係性を理解していったかを詳細に追ってみた。

例えば、図-1にA1の構造図を示す。構造図には初期構造と最終構造があり、行程計画、イメージマップ、観光地イメージ、情報検索プロセス、ヒアリング内容から統一的な基準で作成した。この被験者は、当初から“都市”と“自然”というイメージでオーストラリアを捉えており、シドニー、メルボルン、キャンベラの諸都市とエアーズロックだけを認識していた。ガイドブックで情報を獲得していくことによって、イメージの変化はなかったものの、パースなど新たに数都市が認識に加わり、キャンベラはシドニーの下に位置づけられた。

距離は離れているもののケアンズもシドニーの下になった。自然のイメージには、カカドゥ国立公園も加わり、アデレードからザ・ガンという鉄道でエアーズロックに移動できる情報を発見して、アデレードがエアーズロックの下に位置づけられ、実際に選択されることになった。一方、フィリップ島はメルボルンが拠点となるため都市イメージのツリーに含まれている。最終的な行程は、両方のイメージを網羅するように決定されている。

紙面の制約で図は割愛するが、オーストラリアの被験者のほとんどは当初“都市”と“自然”というイメージからスタートするが、情報検索によって“ワイナリー”や“海”といったより詳細なテーマを発見していくケースが散見された。これにより、アデレードやブリスベンが認識されるようになり、実際に訪問される可能性が高まっている。

図-2にV6の構造図を示す。当初はハノイとホーチミンしか認識していなかったが、情報検索後に“都市”，“遺跡”，“文化”というイメージが構造の核となった。ハノイは遺跡と文化を巡る拠点としての位置づけになっており、都市としての魅力はホーチミン以下であると理解していた。最終的に、ホーチミンを中心に周遊する行程となり、フエ等の都市までは足を伸ばさずに結局ハノイは選択されている。ベトナムの場合は、ほとんどの被験者がV6のようにハノイやホーチミンしか初期に認識していなかった。情報検索により、オーストラリアのような都市や自然といったイメージよりは、“古都”，“少数民族”，“中部”といった文化や地理的条件が構造化のキーワードとなるようである。

観光地の構造化について、初期の段階で持ったイメージを保持したままそれぞれに属する観光地を選定していった被験者(タイプa)が11名、初期イメージにこだわらず、柔軟にこれらを変更していった被験者(タイプb)が9名であった。また、構造図の各ツリーから万遍なく観光地を選択した被験者(タイプx)が14名、少数・特定のツリーに絞って観光地を選択した被験者(タイプy)が6名であった。これらのタイプが、旅行経験や年代で特徴的に分かれているのかを確認した。40才以上と20代前半はほぼ全員がタイプxに属しており、それ以外の世代はどちらかといえばタイプyが多かった。世代特有の価値観やライフスタイルが影響している可能性が高い。タイプa,bについては特徴的な分類はできなかった。

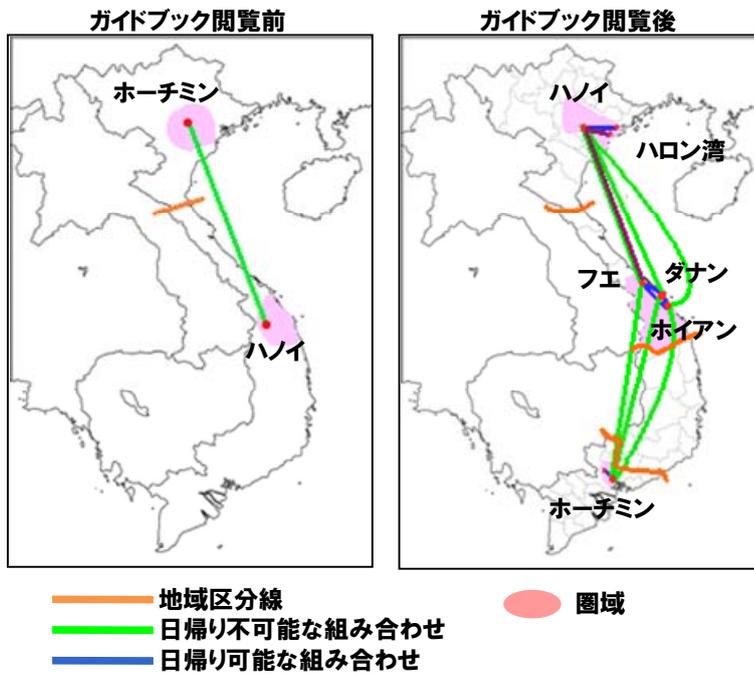


図-3 被験者V8の認知地図の前後比較

(3) 情報検索前後の地域区分の変化

図-3は、被験者V8が情報検索前後でベトナムの主要観光地とその位置関係の認識をどのように変化させたかを示している。当初、ホーチミンとハノイしか認識しておらず、南北の位置関係が逆になっていたが、日帰り不可能であるという認識は正しかった。地域区分についても、二大都市の認知に引きずられて二地域区分となっている。しかし、旅行計画後には、フエやホイアンといった中部の都市も認知され、これらはフエを拠点に一体の圏域として認識されている。ハノイ周辺のハロン湾についてもハノイからの日帰り圏内と認識された。地域区分は北部・中部・南部を基本に、南部はホーチミンとそれ以外の地域に分かれている。

オーストラリアの場合は、多くの被験者はその大きさを小さく捉えがちであり、日帰り可能な観光地の組み合わせが多いと捉えていたが、ガイドブックによりほとんどが日帰り不可能と理解を改めた。地域区分については、ガイドブック閲覧前から複数の地域に分割していた被験者が多く、オーストラリアに多様な魅力要素があることを感じていたように思われる。

一方、ベトナムの場合は、ハノイとホーチミンの位

置が南北逆である初期認識が圧倒的に多かった。また、都市間の時間距離感覚もほとんど理解不能であったようである。地域区分も最終的には南部、中部、北部などの地理的条件で行われていることが多かった。

(4) 総合的考察

ベトナムは初期段階では多様な魅力が認識されていなかったが、情報により地理的条件をベースにした文化的な多様性が認識されるようであった。この場合、国としてよりはむしろ地域としてまとまりを持ったイメージを強化した方が得策かもしれない。一方、オーストラリアは、地域別に魅力を伝えるよりは、オーストラリア全体として多様な魅力を感じてもらいつつ、テーマ設定でアピールした方が得策であると考えられる。

いずれの場合にも、情報検索により周遊範囲が柔軟に拡大していく可能性があることが理解できた。

4. おわりに

本研究では、オーストラリアとベトナムをケーススタディーに、海外旅行計画時の周遊範囲の決定行動を実験的に把握した。

今後は、東アジア国籍、欧米国籍を有する被験者に、訪日旅行を対象に同様の調査を実施したい。その際に訪日観光未経験者だけでなく、経験者についても調査を実施して、リピーター獲得に向けた戦略も併せて検討したい。

参考文献

- 1) 岡本直久：観光交通計画のための調査および分析手法に関する研究，東京工業大学博士論文，1996。
- 2) 屋井鉄雄・清水哲夫・坂井康一・小林亜紀子：非IIA型選択モデルの選択肢集合とパラメータ特性，土木学会論文集，No.702，pp.3-13，2002。
- 3) Therkelsen, A.: Imaging Places: Image Formation of Tourists and its Consequences for Destination Promotion, Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism, 2003.
- 4) 佐々木土師二：旅行者行動の心理学，関西大学出版社，2000。